

特別寄稿

創造の原点と輝き — 2

伊勢神宮の式年遷宮に見るわが国文化の原点 — 1



浅野忠利

●神宮式年遷宮の道筋

伊勢神宮は正式には神宮と称する。日本書記や神宮5部書に、2000年前の垂仁天皇26年秋9月甲子の日に鎮座とある。天照大御神を祀る皇大神宮(内宮)、衣食住を司る豊受大御神を祀る豊受大神宮(外宮)を中心に14の別宮、43の摂社(延喜式神名帳に記載)、24の末社(神宮儀式帳に記載)、42の所管社、計125社からなる。皇室の氏神とされ、特に明治から敗戦までの国家神道では別格とされ、格付け制度を超えた存在である。

式年遷宮の制は685年、20年に一度と定められた。690年に内宮、692年に外宮の最初の遷宮が行われてた。その対象となるのは、内宮・外宮の2正宮、14の別宮の総ての社殿を新たにし神座を遷す。併せ、宝殿外幣殿、鳥居、御垣、御選殿など65棟の殿舎のほか、装束・神宝、宇治橋なども新たにされる。この式年遷宮は2013年第62回目を迎える。

式年遷宮1320年の歴史の中、戦国時代の混乱により、最大120年に及ぶ間隔ををあけることもあったが、16世紀末に再開されて以来、敗戦まで何の乱れもなく、正確に刻まれた。1945年第59回式年遷宮の延期を宣言し、1949年遷宮を行うべき年に宇治橋の付け替えのみを実施、4年後の1953年第59回式年遷宮を正常に戻した。

●式年遷宮の原則

式年遷宮には守るべき原則がある。大小粗密いろいろあるが、次の3点は根幹に触れる大切な要件である。

①常に新しく：総てを新しく、常に新しく。新しさの中で生き生きと生き続ける。新しいことによって、自然の営みの中で、人の世代を超える引き継ぎが、無理なく行われていく。いつも新しいままでどの時代も存在する。この世界に類を見ない文化の伝承の方法が、燦然と輝く。伊勢の神宮が新しくなることで日本の国も生まれ変わり、強く若返るとの信仰である。

②役割の完遂と自然への回帰：必要な檜は約10,000m³。殆どの用材は樹齢300年、棟持ち柱は500年の樹齢を要する。これらの檜は再利用が原則である。正殿の棟持ち柱は次の遷宮で、宇治橋の大鳥居となりさ

らに20年後には、参宮街道の入り口の鈴鹿峠の麓の鳥居となり60年の務めを果たす。古材はゆかりの深い神社に払い下げられる。一方、明治以前においては、装束・神宝は燃えるものは燃やし、燃えないものは土に埋めた。式年遷宮で新たにされ、役割りを終えたものは自然に帰すという思想である。今はこのうち一部は20年間保存される。これは本様と言って、次の遷宮に向けて、伝承を確かにするためである。

③前例踏襲と自給自足：前例踏襲という没技能的な厳しい定めの中で、創る者の誠意と職人芸による最高の質が要求される。そこに職人は自らの個性を、禁欲的に注ぎ込む。更に、神宮の自らの手による生産・調達原則である。材料が枯渇すれば全国を行脚する。創り手が心もとなくなれば、自ら技術伝承の受け手を見出し、育成の手立てを講じる。現在木曾に頼っている檜の調達は、今後伊勢の領内で総て賄おうとしている。1923年に始められ、今から120年後には檜の自給自足が実現する。2000年計画である。

このように、式年遷宮は『持続可能性(サステナブル)』、『環境共生(シンビオティック)』、『資源循環(リサイクル)』等の最新の社会的要請に対し、遙か以前より応え続けてきたことに驚かされる。

●式年遷宮の財政

平成25年まで続く式年遷宮に向けての営みは、2004年今上天皇によって開始された。今回の遷宮の事業費は550億円。これを神宮自己資金330億円と(財)伊勢神宮式年遷宮奉賛会が神社本庁の協力を得て220億円を集める全国民の奉賛である。戦後一民間の宗教法人となった神宮が、一切の国費なしに、行えるのは、天皇の氏神としての位置づけも大きい。最も大切なことは、国民の多くが、この式年遷宮にわが国文化の原点としての輝きを見るからである。

今回は、伊勢神宮の式年遷宮の概要を記したが、次回は建築、装束神宝等の各論により、式年遷宮の理解を深めたい。

(つづく)